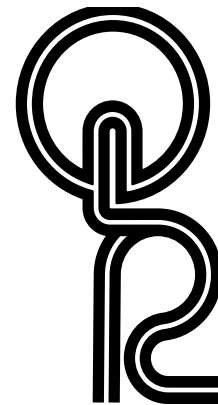


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 12 No.6, 2005



カナダ, ユーコン準州における Dawson tephra (26 ka) と最終氷期に形成された Ice wedge の露頭. 正面に見える白色の地層が Dawson tephra で, 写真では不明瞭であるがその下に Ice wedge が発達する. (2005年8月、青木がおり撮影)

Vol. 12 No. 6

December 1, 2005

Shackleton博士「ブループラネット賞」 受賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・2	人類科学集会のお知らせ・・・・・・・・・・6
第四紀学会 2006 年大会案内 (第1報) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3	北淡活断層シンポジウムの案内・・・・・8
第四紀学会シンポジウムのお知らせ・4	鮮新世は第四紀?・・・・・・・・・・・・・・10
地球惑星科学連合 2006 年大会 (第1 報)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5	SCOTAV 研究集会・巡検報告・・・・・・・・12
Quaternary Perspectives の転載・5	ネオテクトニクス研究委員会野外集会 報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
	幹事会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
	会員消息・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

Cambridge大学名誉教授Shackleton博士の「ブループラネット賞」受賞について

小池裕子（九州大学大学院比較社会文化研究院）

毎年、(財)旭硝子財団が行なっている地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、地球環境問題の解決に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人・組織に対して贈られるもので、今年の第14回受賞者としてケンブリッジ大学地球科学科名誉教授のNickolas Shackleton博士が選ばれた。表彰式は10月19日(水)に東京會館で、翌10月20日(木)に記念講演会が国際連合大学(東京都渋谷区)で開催された。彼の業績は、第四紀学にとって最も重要な課題である古気候学に貢献し、将来の気候変動予測に大きく寄与したことである。地球の過去の気候変動を知ることは、今後の気候変動をシミュレーションする際の信頼性を向上させるという観点から、第四紀から現代までに何度も繰り返された氷床の消長を酸素同位体比法により正確に解析する手法を編み出した。また第四紀の気候変動を理解することを通して、地球温暖化ガスの増加が、過去に起こったのと同様の急激な気候変動の引き金になるかも知れないことに気付かなければならないと警告した。

この受賞にたいしてShackleton教授自身は、「ブループラネット賞は、惑星地球の自然環境の研究に贈られる最も著名な賞であり、この栄えある賞の受賞者に選ばれ、私としては大変光栄に存じています。私は、研究生活のすべてを地質学上の過去における気候と環境変化をより一層解明することにささげてきました。私は、過去を研究することで、世界中の科学者たちが、我々が作った将来の気候にとっての負のインパクトをどのようにしたら減らすことができるかを学ぶことができると、確信しています。私にとりまして、科学研究者としてのひと



ブループラネット賞で受賞講演を行なうShackleton教授

つの大きな魅力は、多様なバックグラウンドを持ち、研究に対するアプローチの仕方も異なる世界各国の研究者と協力する機会があることです。私の研究生活を通じて、私は少なくとも20カ国以上の異なる国の研究者と仕事をしました。この機会に、私はそれらの人々すべてに対して、私の人生を科学的、文化的そして交流面で富ませてくれたことに感謝をしたいと思います。ケンブリッジ大学は私の研究生活をずっと支えてくれ、従来の伝統的な学際的境界を越えて仕事ができるようにしてくれました。」と受賞挨拶で述べられた。

授賞式の終了後に、この受賞にご尽力された古くからの友人である大場忠道氏のご厚意で、Shackletonご夫妻を囲んで研究者によるお祝いの会が開かれ、元INAQUA副会長(太田陽子氏)、日本第四紀学会の新旧会長(熊井久雄・町田洋氏)や幹事長(山崎晴雄氏)のほか、Shackleton教授と交流のあった高柳洋吉・的場保望・斎藤靖二・本座栄一・多田隆治・北里洋・村山雅史・大河内直彦・横山祐典の各氏が参加した。

翌日の国連大学での講演会はほぼ満席に近く、内容もとても興味深かったとのことでした。Shackletonご夫妻は日本文化にも大変興味を持たれ、大場ご夫妻がご案内した浜離宮での茶席や浮世絵・能楽堂を大変喜ばれたとのことでした。



日本第四紀学会 2006 年大会案内 (第 1 報)

一般研究発表の制限と巡検公募のお知らせ

来年、日本第四紀学会は創立 50 周年を迎えます。2006 年大会ではこの 50 周年記念事業とそれに関連したシンポジウム等が開催される予定であり、これまでの大会とはその内容が大きく異なります。詳細につきましては、検討中の事項もあり、第 2 報以降で詳しくお知らせいたしますが、現時点で予定している従来の大会との違いは以下のような点です。

大会期間の 3 日間を主にシンポジウム、50 周年記念式典・記念講演にあて、一般研究発表はポスターのみとし、口頭発表は行わない。普及講演会については、時期を大会とは別にすることも検討中である。

巡検のコース設定・案内者については、会員からの公募とする。
これらの点を含め、概要をお伝えします。

1. 開催時期・場所・内容 (予定)

期間：2006 年 8 月 4 日 (金) ~ 8 月 6 日 (日)

場所：首都大学東京 (東京都八王子市南大沢)

内容：シンポジウム、50 周年記念事業・記念講演、一般研究発表 (ポスター)、評議員会、総会

2. 一般研究発表の制限について

2006 年大会においては、一般研究発表をポスター発表のみとする予定です。従って、特に口頭発表を希望される方は、地球惑星科学連合 2006 年大会での第四紀セッションあるいはそのほかのセッションへの積極的な参加をお願いいたします。地球惑星科学連合大会については、本通信の関連するページをご覧ください。

3. 巡検の公募について

2006 年大会の巡検につきましては、そのコース設定や案内者を学会員の中から公募することにしました。提案のある方は、以下の条件を満たす企画書を、行事担当幹事までお送り下さい。50 周年にふさわしい企画の提案をお願いいたします。応募の中から 1 件ないし 2 件を採用させていただきます。なお、巡検には学会員以外の方にも参加を呼びかける予定です。

(1) 巡検の期間：2006 年 8 月 7 日 (月) 日帰り、または 8 月 7 日 (月) ~ 8 日 (火) 1 泊 2 日、どちらも現時点での予定日。

(2) 場所：東京から日帰りで行ける範囲。

(3) 企画書の内容：タイトル、案内者、参加人数、移動方法、観察内容、細かなスケジュールと観察ルート、休憩・食事・宿泊先、予定予算の内訳と参加費、代表者とその連絡先 (所属、住所、電話、ファックス、E-mail アドレスなど)、案内書作成・巡検を遂行する上での要望などが含まれていること。形式は自由。

(4) 学会からの巡検準備金：全ての巡検を併せて総額 10 万円まで援助されます。

(5) 企画書送付先：以下の行事担当幹事宛 E-mail または郵送でお送り下さい。問い合わせ先も同様です。

産業技術総合研究所地質情報研究部門 水野清秀

〒 305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第 7 サイト

TEL: 029-861-3681, 3575 FAX: 029-861-3653 E-mail: k4-mizuno@aist.go.jp

(6) 締切：2006 年 1 月 25 日 (必着)

日本第四紀学会主催シンポジウム

「大都市圏の地盤 - 私たちの生活とのかかわり - 」のお知らせ

下記のような内容で第四紀学会主催のシンポジウムが行われます。参加費は無料で、事前登録は必要ありません。ふるって、ご参加下さい。なお、当日午前中、同じ会場にて評議員会が開催されます。

シンポジウム「大都市圏の地盤 - 私たちの生活とのかかわり - 」

日時：2006年1月29日（日） 13:00～17:30（12:30開場）

場所：明治大学 アカデミーコモン 9階 309B教室

（東京都千代田区神田駿河台：JR御茶ノ水駅下車徒歩5分、詳しいアクセス情報は <http://www.meiji.ac.jp/campus/suruga.html> を参照して下さい。）

趣旨：大都市が位置する平野部では開発が爆発的に進展し、軟弱な沖積層や伏在断層の分布域など地震に弱く地盤災害を受けやすい地域にも宅地が広がり、ライフラインが施設されてきました。このような地盤での工学的な特徴あるいは水資源として重要視されている地下水の流れ方や水質は、地形、地層の堆積環境や年代及び地質構造などと密接に関係しています。本シンポジウムでは、日本最大の沈降場で形成された新潟平野及び日本最大の開発地域である関東平野周辺をとりあげ、その地域の地形・地質の形成過程と地盤工学的な特性、地下水流動や水質、及び断層・火山活動などとの関連について、最新の研究成果を紹介していただきます。これらの講演を通じて、地形・地質と私たちの生活とのかかわりを考えるひとつの機会にしたいと考えています。

プログラム

13:00-13:15

趣旨説明（木村克己：産業技術総合研究所）

13:15-14:00

新潟平野の沖積層の堆積システム（卜部厚志：新潟大学）

14:00-14:40

東京の丘陵・台地の生い立ち（鈴木毅彦：首都大学東京）

14:40-15:15

利根川・荒川低地の地形と河道変遷（久保純子：早稲田大学）

休憩 15:15-15:25

15:25-16:00

東京低地北部における沖積層の三次元堆積モデル（田辺 晋：産業技術総合研究所・ほか）

16:00-16:35

沖積地盤の工学的特性 - 特にS波速度値との関係 - （稲崎富士：土木研究所）

16:35-17:10

地下水からみた関東平野の地下環境（林 武司・安原正也：産業技術総合研究所）

17:10-17:30

総合討論

世話人：木村克己・水野清秀・奥村晃史（広島大学）

問い合わせ先：水野清秀 産業技術総合研究所地質情報研究部門

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7サイト

TEL：029-861-3681 FAX：029-861-3653 E-mail：k4-mizuno@aist.go.jp

日本地球惑星科学連合 2006 年大会（第 1 報）

今年 5 月に発足した日本地球惑星科学連合が、従来の地球惑星科学関連学会合同大会を引き継いで下記のとおり、2006 年大会を開催します。日本第四紀学会は日本地球惑星科学連合の一員として、積極的にその活動に参加していきますが、会員各位の大会での研究発表と大会への参加が望まれています。日本第四紀学会は『第四紀』、『活断層と古地震』のセッションを組織していますが、その他にも数多くの第四紀学関連のセッションがあります。どうか、ふるってご参加ください。大会への参加には個人情報登録（下記）が必要となります。

なお、2006 年 8 月の日本第四紀学会 2006 年大会は学会の 50 周年記念事業の一環としての開催が予定されており、口頭発表はシンポジウムの招待講演のみで、一般研究発表はポスター発表に限られる予定です（2006 年 1 月評議員会提案し審議されます）。日本第四紀学会 2006 年大会で発表を計画しておられる方は、地球惑星科学連合大会の『第四紀』セッションでの口頭発表を是非ご検討ください。

期日：2006 年 5 月 14 日（日）～ 5 月 18 日（木）

場所：幕張メッセ（千葉市美浜区湾岸幕張駅下車）

大会詳細：<http://www.jpгу.org/meeting/index.htm>

（日本地球惑星科学連合：<http://www.jpгу.org/>）

予稿集投稿受付：2006 年 1 月 10 日～ 2 月 8 日（早期受付は 2 月 1 日締切）

プログラム確定：2006 年 3 月 18 日

日本地球惑星科学連合への個人情報登録のお願い

日本地球惑星科学連合大会での研究発表と大会参加、および日本地球惑星科学連合が発信する情報を受け取るためには個人情報登録が必要です。また、日本第四紀学会の日本地球惑星科学連合への参加は、実質的には会員各位の個人情報登録によって実現します。そして、日本地球惑星科学連合が、地球惑星科学を代表して国や社会の要請に応え、情報集約と発信をすすめる地球惑星科学を発展させるためにも、所属学会の会員が一人でも多く日本地球惑星科学連合に登録してメンバーとなることが求められています。

個人情報登録は無料です。個人情報登録により以下のサービスを受けることができます。(1) 個人情報登録 ID の発行、(2) ニュースレター (JGL: 年 4 回発行) の無料送付、(3) お知らせなどメールによる連絡、(4) 連合大会の参加手続きの簡略化。連合大会へ参加する場合には、個人情報登録 ID が必要です。

日本地球惑星科学連合ホームページ <http://www.jpгу.org/>

同 個人情報登録ページ <http://www.jpгу.org/entry.html>

Quaternary Perspectives の転載に関して

国際第四紀学連合 (INQUA) のニュースレター誌である Quaternary Perspectives については、従来、第四紀研究に転載を行ってきました。しかし、INQUA やエルゼビアのホームページからダウンロードが自由に可能であることから、今後は転載を行わないことになりました。ダウンロードが可能なサイトのアドレスは以下の通りです。

INQUA: <http://www.inqua.tcd.ie/qp.html>

Elsevier: http://www.elsevier.com/wps/find/newsletterdescription.cws_home/601554/description

最新号は、INQUA のホームページに掲載されます。現在の最新号は、15 巻 1 号 (2005) になります。第四紀研究に転載されている最後の号は、13 巻 2 号 (2003) で、第四紀研究 42 巻 6 号 (2003) に転載されています。

「第11回人類科学集会」のお知らせ

本年も残り少なくなってまいりましたが、皆様には益々ご健勝のことと存じます。さて、以下のように第11回の「人類科学集会」(講演会)を開催いたしますので、周囲の方ともお誘い合わせの上ご出席くださいますようお願い申し上げます。

人類科学集会世話人会(幹事:松浦,近藤)

日時:平成17年12月16日(金)午後3時30分~午後5時頃
場所:お茶の水女子大学 理学部3号館7階 大講義室(701室)
(東京都文京区大塚2-1-1;添付案内図参照)
講師:京都大学霊長類研究所 所長 教授 茂原信生先生
演題:「ミャンマーでの始新世霊長類化石の発掘とその意味」

- (1) 上記講演会終了後に懇親会*を予定しております
(会費7千円[学生4千円],「茗溪会館」*にて)
懇親会へ出席の方は、準備の都合上、11月25日(金)までに後記の 懇親会出席
を電子メールにてご返信くださいますようお願いいたします。
講演会にだけ参加される方は事前申込みの必要はありません。
- (2) 本案内を周囲の方にお知らせくださる場合は、上記(1)につきましてもご注意ください。
- (3) お茶大への交通アクセスの参照
Web 頁: <http://www.ocha.ac.jp/access/index.html>

* 午後5時20分頃より、「茗溪会館,地下 グリル」(東京都文京区大塚1-5-23: Tel. 03-3943-0321)にて。研究分野,地域,世代を超えて自由に話し,一緒に食べて飲む気のおけない懇親会にしたいと思っておりますので,皆様是非ご参加ください。

==== 以下,懇親会出席の場合はご返信ください ====
(講演会にだけ参加される方は事前申込みの必要はありません。当日会場にお越しください)

=====

懇親会出席

講演会終了後の懇親会(会費7千円[学生4千円])への参加を申し込みます。

氏名・所属(出席者が複数の場合は全員の氏名・所属をお書きください):

=====

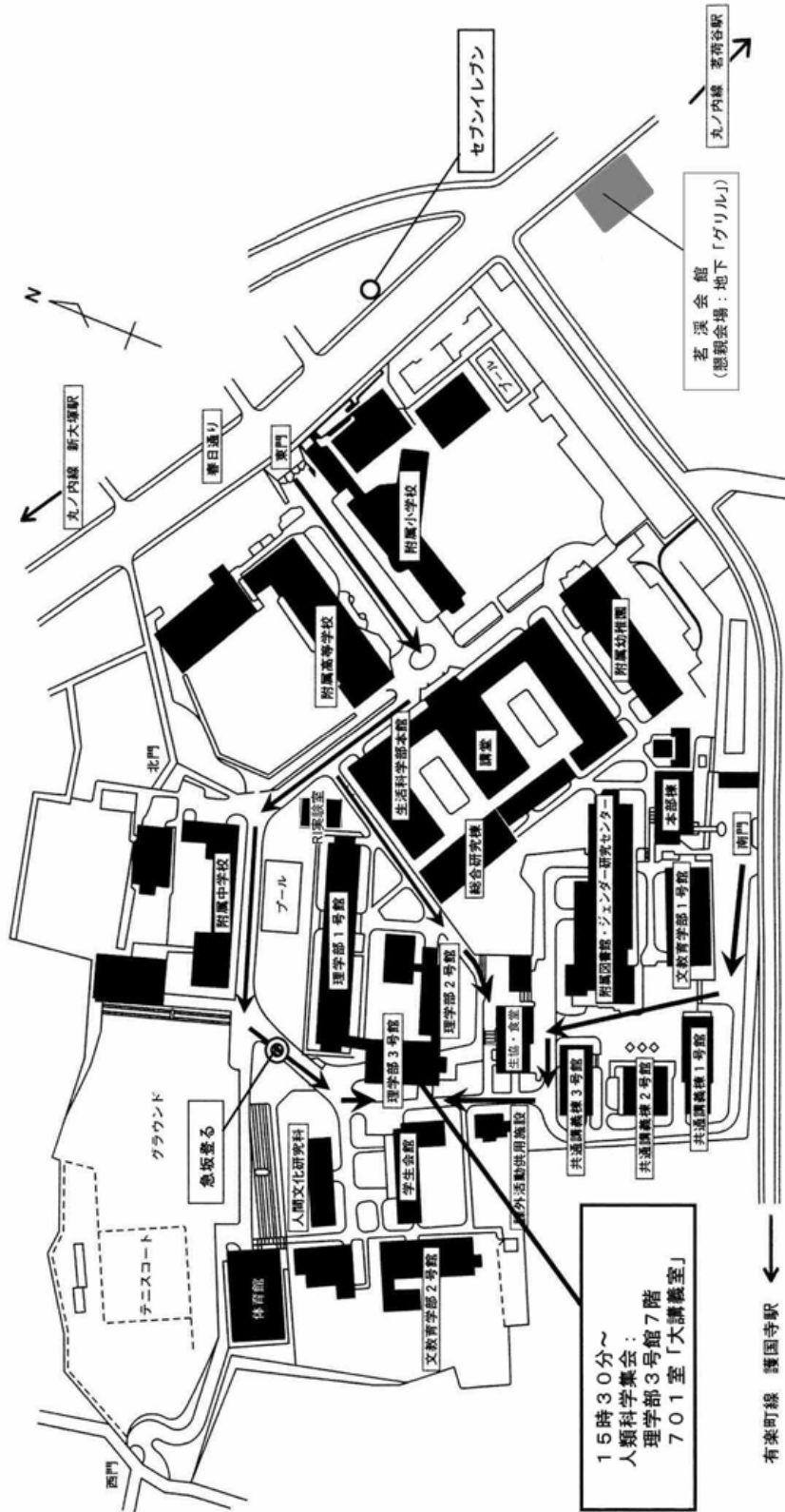
***** 人類科学集会 *****

pananthropology1994@yahoo.co.jp

お茶の水女子大学案内図

人類科学集会へは、下記構内図の矢印(←)に沿って進んでください。生活科学部本館とR1実験室との間の道を入った方が近道ですが、理学部3号館の入口がわかりにくいかもれません(理学部3号館の玄関は、生協と理学部との間の階段をのぼって右方向)。

(東門, 南門にて身分証明書等の提示あるいは入構者ノートへの記名をお願いいたします)



北淡活断層シンポジウム2006

「淡路島と世界の地震・活断層」のご案内

主催：北淡活断層シンポジウム実行委員会（委員長：岡田篤正，事務局幹事：加藤茂弘）
共催：活断層研究会 産業総合研究所活断層研究センター 兵庫県立人と自然の博物館（予定）
後援：兵庫県・兵庫県教育委員会 淡路市・淡路市教育委員会 株式会社ほくだん（予定）

1. 開催場所 兵庫県淡路市小倉・北淡震災記念公園セミナーハウス
2. 日 時 2006年1月14日（土）午後1時～1月15日（日）午後1時頃まで
3. 宿泊場所 北淡自然休養村センター（小型バス送迎）・周辺の民宿（徒歩）
4. 旅 費 招待講演者と若手研究者（参加者数により支給上限あり）に優先支給．一般聴講者は原則自費，科学研究費等の関係者はその経費で負担してください．
5. 一般ポスター発表者の公募期限 12月23日（金）まで 兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛に申し込み．発表要旨は申し込みと同時に送付してください．
6. 参加希望者 12月23日までに申し込むこと 兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛
7. 予稿集の締切

期限は12月23日（金），写真製版用の原稿は郵送にて，Wordもしくはpdf形式の電子原稿はメールにて，ともに下記の加藤茂弘宛に．

ポスター発表者・参加希望者申し込み・予稿集送付先：

兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛（発表と参加申込はメール・Faxにてお願いします）

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6

電話：079-559-2017，Fax：079-559-2017

E-mail：katochan@hitohaku.jp

8. 予稿集の書式等

予稿集原稿はA4サイズで2頁または4頁，第四紀学会予稿集に準拠（上余白30mm，下余白35mm，左右余白25mm，タイトルの前15mm余白，タイトル（ゴチ），氏名（所属），英文タイトル．本文は1行漢字35文字，1頁36行を目安とします）．

第四紀学会の様式がおわかりにならない方は，原稿をWordで作成してメールで，図版はおよその割付を指定して加藤茂弘宛に送付頂ければ，事務局で第四紀学会予稿集に準拠して作成します．その時には1ページあたり1行35文字×36行を目安に作成してください．

図版は原図に限らず，鮮明なコピーを送付頂くか，pdfもしくはj-pegファイルで保存したフロッピーないしCD-ROMを送付ください．また，2Mb未満のデジタル図版であれば，メールにて送付頂くことも可能です．それ以上のファイルは上記の媒体にて加藤茂弘宛に送付ください．

9. 活断層シンポジウム2006 予定（演題は変更になる場合もあります）

第1日：2006年1月14日（土）午後1時～午後3時20分

1. 普及講演会 「淡路島をとりまく活断層と地震」

国生み神話の島・淡路島は，野島断層をはじめ多くの活断層を抱えるだけでなく，東の大坂湾断層，南の中央構造線など，海底活断層に囲まれた島でもあります．これら淡路島をとりまく活断層について最新の調査成果を報告するとともに，淡路島にも多大な災害を与える可能性が高い近未来の南海地震や津波について，昨年末のスマトラ沖地震の例を参考に考えていきます．

司会進行：加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館）

講演1 淡路島をめぐる活断層と地震

1：00～1：40 栗田泰夫（産総研・活断層研究センター）

講演2 六甲活断層帯と有馬・高槻断層帯

1：40～2：20 岡田篤正（京都大）

講演3 災害と文化財

2:20 ~ 3:00 桂 雄三(文化庁)

質疑・応答(20分)

(休憩 10分)

2. 一般及び学術シンポジウム「沈み込み帯の超巨大地震と津波・地殻変動」

司会進行:千田 昇(大分大)

講演4 スマトラ沖巨大地震と津波

3:30 ~ 4:00 海津正倫(名古屋大)

講演5 スマトラ沖地震に伴う地殻変動

4:00 ~ 4:30 池田安隆(東京大)

講演6 ユーラシアプレートとインド・オーストラリアプレート境界の巨大地震

4:30 ~ 5:00 石川有三(気象庁)

質疑・応答(20分)

5:00 ~ 5:20

3. ポスターセッションのポスター設置

5:20 ~ 6:00

4. 懇親会(レストラン「さくら」にて,希望者のみ.参加費 3,000円)

6:00 ~ 8:00

8:00 ~ 宿泊地へ移動(自然休養村・その他の民宿)

第2日:2006年1月15日(日) 午前9時~午後1時

1. ポスター展示 9:00 ~ 9:40

2. 学術シンポジウム「近年の活断層地震を考える」

新潟中越地震や福岡県西方沖地震など,2004~2005年に発生した活断層地震についての研究を紹介するとともに各地震が与えた今後の課題を整理し,活断層研究の将来を展望します.

司会進行:岡田篤正(京都大)

講演7 新潟中越地震と活断層

9:40 ~ 10:20 鈴木康弘(名古屋大)

講演8 福岡県西方沖地震と活断層

10:20 ~ 11:00 千田 昇(大分大)

(休憩 10分)

講演9 近年の被害地震による地表変動と液状化現象

11:10 ~ 11:50 寒川 旭(産総研・活断層研究センター)

講演10 2005年パキスタン地震

11:50 ~ 12:30 中田 高(広島工業大)

質疑・応答(20分)

閉会あいさつ 松田時彦(地震予知総合研究振興会,野島断層活用委員会委員長)

12:50 ~ 12:55

・セミナーハウスでのポスターセッション展示

初日午後1時~2日目午後1時(13:00以降に撤収.希望者のみ)

ポスター掲示は初日の午後1時までと午後5時~6時までの間をお願いします.

寄贈ポスターは,セミナーハウスのロビーにて1ヶ月ほど掲示します.

・交通

JR山陽線明石駅下車,南に約1km(約15分)で,富島行き的高速船(淡路ジェノバライン;HP参照).明石港発 富島行(6:25,7:25,8:25,9:25,11:25,13:00,14:0,15:30,17:00,18:00,19:00)で富島港着.

これ以外の行き方は 野島断層保存館のHP(<http://www.nojima-danso.co.jp/top.html>)を参照のこと.

鮮新世は第四紀？

国際層序委員会の提案に対する皆さんの意見をお聞かせ下さい。

齋藤文紀（産業技術総合研究所）

2004年8月に開催された万国地質学会（IGC）の第32回大会において、地質年代区分から第四紀が無くなった表が配付され、問題になっていることは、第四紀通信（11巻3号 p. 14-15; 4号, p. 16-17; 5号, p. 4-5; 6号, p. 8）や日本地質学会ニュース（7(10), p. 18）ですでに紹介されています。国際地質科学連合（IUGS）に提案されたこの年代区分表は、IGCの32回大会において批准されず、上記の紹介記事にも示されているように、第四紀に関するIUGSの国際層序委員会（ICS）と国際第四紀学連合（INQUA）の合同作業チームが設置されました。合同作業チームはICSに対して資料1の提案を行い、これを受けてICSは、今年9月に行われたベルギーの会合の結果をもとに、IUGSの理事会に資料2の提案を行っています。

資料1．合同作業チームの提案

1. 第四紀は、正式に承認・批准された地質年代学的／年代層序学的な新生代／界の区分とする。
2. 第四紀の下限は、GSSP（Global Boundary Stratotype Sections and Points）によって定義された鮮新世／統のゲラシアンの下限とする。第四紀／系は、過去約260万年間の年代と地層とする。
3. 第四紀は、紀または亜代とする。

資料2．IUGS 理事会への批准申請

1. 第四紀は、正式な新生代の年代層序学的な区分とする。
2. 第四紀は、過去260万年の期間とし、基底をGSSPで承認された鮮新世のゲラシアンの基底に一致させる。
3. 第四紀は、地質年代区分において亜代（亜界）のランクとし、Neogene Periodの最後期（最上部）と一致する。

注：以上では、The Quaternary を第四紀と訳しています。

IUGSへの提案は、2008年に開催される次回のオスロの大会で、討議投票されることになり、批准されれば、資料2の内容で、新しい「第四紀」の定義が国際的には年代区分として用いられることとなります。

国際第四紀学連合の正式な雑誌である Quaternary International の144巻1号99-100ページに（2006年2月号、オンラインジャーナルで見ることができます）、国際第四紀学連合の John J. Clague 会長から、この第四紀問題に関する昨今の状況説明がされており、国際第四紀学連合としては、ICS/IUGS への今後の対応のために、ICSの提案に対する世界の第四紀研究者からの意見を募っています。締め切りは2006年2月15日です。是非、皆さんのご意見を直接、お送り下さい。

送付先：Prof. John Clague, INQUA, Department of Earth Sciences,
Simon Fraser University, Burnaby, BC, Canada V5A 1S6
E-mail address: jclague@sfu.ca

また、日本第四紀学会でも、この問題に関して意見書を国際第四紀学連合に送付する予定ですので、2006年1月15日までに、皆さんのご意見をお聞かせ下さい。

送付先：齋藤文紀, 305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7
産業技術総合研究所地質情報研究部門
E-mail: yoshiki.saito@aist.go.jp

地質年代区分「第四紀」に関連する情報は、以下のウェブページから入手できます。

IUGS : <http://www.iugs.org/>

IUGS の ICS (国際層序委員会) : <http://www.stratigraphy.org/>

IUGS-ICSの第四紀サブコミッション: <http://www.quaternary.stratigraphy.org.uk/>

IUGS-ICSの層序区分サブコミッション: http://www.geocities.com/issc_arg/

国際第四紀学連合 : <http://www.inqua.tcd.ie/>

Quaternary Perspectives (国際第四紀学連合のニュースレター) もここからダウンロードできます。最新号は 15 巻 1号です。

Quaternary Sub-Era of Cenozoic (not to scale)

AGE (Ma)	ERA	Sub-ERA	PERIOD	EPOCH	STAGE	GSSP (Ma)	
1	CENOZOIC	Quaternary	NEOGENE	Holocene /	Late		
				Pleistocene	Middle		
2					Early	1.8	
3		TERTIARY			Pliocene	Gelasian	2.6
4						Piacenzian	3.6
						Zanclean	5.3
10						Miocene	
20						23.0	
30				PALEOGENE	Oligocene		
40					Eocene		33.9
50				Paleocene		55.8	
60						65.5	

提案された地質年代区分。第四紀は、使用可能な正式な区分。第三紀は、使用可能な非公式な区分。

「International Field Conference and Workshop on Tephrochronology and Volcanism: "Tephra Rush 2005", Dawson City, Yukon Territory, Canada」参加報告

鈴木毅彦(首都大学東京 都市環境学部)

今回の国際第四紀連合(INQUA)までの折り返し点にあたるこの夏、INQUA Sub-Commission for Tephrochronology and Volcanism(SCOTAV)による標記の集会・巡検が2005年7月31日～8月8日の9日間、カナダのユーコン準州ドーソン・シティで開催された。巡検については第四紀通信本号に別途記事があるので、ここでは集会について報告する。

今回の会場となったドーソンの町は人口2000人程の小さな町で、集会の参加者は人口の2%にあたる約40名である。このように小さな町で開催された小さな集会というのが本会の特徴である。参加者数は北・南米からはカナダ13、米国6、アルゼンチン1であり、アジア・太平洋からは日本8、ニュージーランド3、オーストラリア・台湾・インドネシアから各1、またヨーロッパからは英国5、オランダ・スウェーデンの各1である。

町の小さな建物2階の大広間を借り上げた会場は、50脚程度の椅子を並べ、正面に液晶プロジェクター用のスクリーンをぶら下げただけの至ってシンプルなものである。この会場にて3日間にわたり34件の口頭発表と11件のポスター発表が行われた。口頭発表は開催地域にかかわる Beringia を頭として、INTIMATE (INtegration of Ice-cores, Marine and Terrestrial records の略)、Characterization and weathered tephra, Chronology, environmental, Cryptotephra and some applications, Regional studies と名付けられたセッション群から構成された。会期の長さや口頭発表の件数からわかるように、時間には充分なゆとりがあり、一件あたり25分と長い。このため様々な発表をじっくり聞くことができた。普段の慌ただしい学会の進行と異なり、各テーマを掘り下げて聞くことができるので、各国・各地域のテフラ研究の現状や、海外の研究者がどのような方法でテフラ研究を進めているかを良く理解することができる。とくに開催地周辺のテフラ研究の報告では、新生代氷河時代の開始、氷床と周氷河現象、動物群変遷、人類の移動などとの関係に言及され、大変興味深いものであった。また、現在ヨーロッパ北部で注目されている Cryptotephra (肉眼で検出が難しいテフラ)を対象とするテフラ研究と、後期更新世以降の環境変化に関連する研究動向が複数の研究者から報告され、どの様な点に注目されて

いるのかを伺い知ることができた。これにあわせてグリーンランド氷床や南極氷床のアイスコアからのテフラの検出が多く、参加者の関心を集めていたようである。また、インド洋の Toba tephra をはじめとする、南北太平洋や北大西洋のマリンテフラの報告もあり、まさにテフラ研究の空間的広さを感じさせる研究報告も目についた。テフラ研究は研究対象地域の特性によりアプローチの方法が異なるのだが、今回もその事を強く感じた。

このような利点はあったものの、これまで開催された幾つかの同集会に較べて発表件数が若干少ないため、世界中のテフラ研究を網羅するまでにはいたらなかった。とくに今回は、隣国の米国からの参加者が少なく、米国本土西部の第四紀テフロクロノロジーなどは同じ地続きの地域にいながら聞くことができなかった。また、いつもに較べてヨーロッパからの参加者が少なく、イタリアなどのテフラ研究の動向なども知ることができなかった。これは開催地が北極圏まであと数100kmという辺境の地であったためであろうか。

現在、INQUA Commissionの構造改変が行われたばかりであり、今後のSCOTAVの活動が気になるところである。なお、今回の開催地に関して、日本招致の可能性について国内の対応委員会である本学会のテフラ・火山研究委員会において今後検討する予定である。

最後になるが今回の集会は、D. Froese (University of Alberta, Canada), J. Westgate (University of Toronto, Canada), B. Alloway (Institute of Geological & Nuclear Science, NZ)ら各氏の精力的なオーガナイズによるものである。ここに感謝の意を表したい。



ドーソン・シティで開催された研究集会の様子

「International Field Conference and Workshop on Tephrochronology and Volcanism: "Tephra Rush 2005", Dawson City, Yukon Territory, Canada」巡検参加報告

青木かおり（産業総合研究所）

国際第四紀連合（INQUA）のSub-Commission for Tephrochronology and Volcanism（SCOTAV）によって2005年7月31日から8月8日に開催された標記の会議に伴い、現地 Yukon で巡検が行われた。本稿では巡検のほか、見聞する機会に恵まれた様々なものについて報告したい。

今回の会議はアルバータ大学のD. Froese博士、トロント大学のJ. Westgate博士、ニュージーランドのInstitute of Geological & Nuclear ScienceのB. Alloway博士の3人がオーガナイザーで、参加者は11カ国から40人が参加した（日本からは8人が参加し、アラスカ大学の吉川博士がドーソンの会議から参加した）。会期中、午後3時ごろになると夕立に降られることもあったが、これはこの地域ではいつものことらしいので、全般としてお天気にとでも恵まれたといえるだろう。高緯度で北極圏に近いことから、夜9時を過ぎても十分明るく、完全に暗くなる時間は数時間しかなかった。昼間の気温は20度を越すものの、夜には10度以下になるためセーターや秋冬に着る上着などが必須である。会議が行われたドーソンという町は1896年にユーコン川流域でGold Rushが始まったことで開かれた町で、今回の会議はそこから"Tephra Rush 2005"とネーミングされていた。

初日の7月31日はユーコン準州の基幹空港のあるホワイトホースに各国の参加者が集合し、夜から地元の博物館であるBeringia Centreに案内された。ユーコンの大半は、最終氷期にはローレントイド氷床とコルディエラ氷床に覆われており、ユーラシアからベーリング海を経て北米に人が移動してきたいわゆる無氷回廊ができた地域で、考古学的にも古生物学的にも非常に興味深い地域である。Beringia Centreは最終氷期のユーコンの古環境にスポットを当てた展示がなされており、マンモス化石が据えられたメインホールで、今回のホストの一人であるトロント大学のWestgate先生より開会の挨拶と立食形式のパーティーが行われた。

翌8月1日は会議の会場であるドーソンまで複数の車に分乗して出発した。ホワイトホースからドーソンまでは、山岳地帯のKlondike Highwayをひたすら走って約536kmの行程である。出発して100kmほどで分水嶺を越えたあたりから、氷河性の湖が点在し河川が縦横に

走っている一帯を抜けてゆく。これから我々が向かうドーソンはこの河川水が集約してゆくユーコン川のほとりにあるのだ。途中、6ヶ所で地形や露頭を見る機会が設けられ、河岸段丘、テフラ、古土壌、ice wedge cast, paleo sand wedge、全長450kmに及ぶTintina trenchを見る機会を得た。参加者が水を得た魚のようになるのはやはりテフラの露頭で、White River tephraという約1200年前のテフラ層を前にして、化学組成の特徴や、給源火山、噴火の規模の話題に対してひとしきり質問が飛んだ。多くの参加者がテフラのサンプリングに取り掛かると同時に、サンドイッチと飲み物が配られて露頭を目の前にしてランチタイムとなった。日本からの参加者の間では、目の前の真っ白なテフラを眺めながら、日本のテフラではどれに似ているか？といった議論や、White Riverは緯度（北緯63度）からいって、グリーンランドの氷床コアに届いているのではないかと話は尽きない。

3日間にわたる研究発表が終わると、2日間の野外巡検が始まった。ユーコン北西部のクロンダイクと呼ばれる地域に、永久凍土やice wedgeなどが存在している。また、アラスカを経て北極海へ注ぐユーコン川によって大量の砂礫が運ばれて、流域の地形形成が大きくコントロールされてきた。そして、アラスカ側にあるWrangell Volcanic Fieldと呼ばれる火山地帯と、アリューシャン列島の火山からもたらされるテフラが、ユーコンの古環境研究の年代指標層として利用されており、今回の巡検の主なテーマは鮮新世-更新世のユーコンの古環境とテフロクロノロジーであった。

1日目（8月5日）の巡検は、現在のユーコン川の支流を遡って、古ユーコン川によって形成された流域の段丘礫層と、その上に堆積している鮮新世～前期更新統のレスに介在するテフラを見るところから始まった。レス中のテフラの保存状態は良好である。日本からの参加者にとっては、前期更新統の土壌中のテフラといえは風化しているのが常であるため、気温と湿度が低いことでこれほど保存状態が良いものかと驚きを隠せなかった。

そしてこの日の巡検で参加者が一様に興奮したのは、クロンダイク地域でmuckと呼ばれる後期更新世以降の堆積物の露頭に案内されたときである。有機物に富んだシルトからなる

堆積物で、永久凍土として凍結して非常に立派なice wedgeが形成されている。溶け出した泥からは、マンモスやバイソンなど多くの大型哺乳動物化石や植物化石が残存していることから古生物の研究には大変重要な堆積物だそうだ。今回の巡検の最中にも、溶け出している泥の中からいくつも動物化石が見つかった。最後に、Gold Rush頃の砂金採掘地点へと案内された。そこには投棄された錆だらけのシャベルやフルイと、かつて金を探していたところに土中から出てきたであろうバイソンやマンモス、馬の骨が大量に野ざらしになっていた。「夏草や兵どもが夢の跡」の句を思い起こさせるものがあるが、ユーコンの短く涼しい夏では夏草が生い茂る間も無く、荒涼としたシュールな光景は時間が止まったようであった。

巡検2日目は前日とは別の支流をさかのぼり、中期～前期更新統のレスとテフラ、現在稼動中の金の鉱区内にある過去100万年間で谷間を埋め立てた分厚い礫層などを見学した。もっとも衝撃的だったのは、アラスカ～ユーコンに広く分布する広域テフラのDawson tephra (ca. 28 ka)の露頭である。案内された露頭は、淘汰の良いガラス質火山灰層が30 cm程の層厚で堆積している、それだけであれば何ということも無いのだが、そこから日陰に回りこむと実に不思議な光景が広がっていた。Dawson tephraの直下から、あるいはテフラ層を貫く形で非常に立派なIce wedgeがいくつも形成されていたのだ。現在の永久凍土の活動層はテフラ層より上位にあるので、そこから水分が供給されており、一方でテフラ層の直下に形成されているIce wedgeはテフラ降下当時のものが保存されているという。テフラ層と個々のIce wedgeが形成された順序を考えは

じめると、なかなか露頭から離れられなくなってしまう。

巡検全体を通してFroese博士が大半の解説役を担当されていた。地形形成史から植生、動物化石、古土壌、周氷河現象、果てはユーコンのGold Rush時代の開拓の話にいたるまで多岐にわたっての解説をよどみなく話し、今回の会議のために周到な準備をされていたことが伺われた。また、個々のテフラの話題になるとWestgate先生が交代して解説し始めるのだが、それはそれは楽しそうにテフラの特徴を語る様が実に印象的だった。露頭とテフラを目の前にしたときのテフロクロノジストの様子はどこでも同じなのだ、と感じたものである。

いくつか不満があったとすれば、途中で巡検案内書には掲載されていない場所に突然立ち寄って、参加者が自分の居場所が地図上でつかめずに戸惑ったことや、アラスカ～ユーコンに分布する後期更新世の広域テフラOld Crow tephraを見る機会がなかったこと、会議全般を通じての英語があまりに速かったこと(非英語圏の研究者に対する配慮が少し欠けていた)などである。しかし、北米でもとりわけユニークな場所での巡検で、これまでに見たこともない景観とテフラの競演は、十分に見ごたえがあり面白いものであった。また、オーガナイザーのFroese博士、Alloway博士をはじめ、現地に詳しい研究者や院生が手分けして、Dawson～Whitehorseの1000km超の往復路と巡検を通じてずっと運転手を勤められており、実に大変だったと思う。感謝と敬意を表したい。

最後に付け加えると、日本からの参加者には会期中に再三「次(おそらく4年後か)のField Conferenceは日本で」との声をかけられていた。どうでしょう？みなさん、やりますか？

ネオテクトニクス研究委員会野外集会

「2004年中越地震から学ぶこと = 第四紀テクトニクスにおける意義と被害 = 」の参加報告

本学会ネオテクトニクス研究委員会主催の標記行事が7月31日と8月1日の2日間、新潟県中越地震の震源域及びその周辺で開催されました。この野外集会は、新潟県中越地域の第四紀テクトニクスと昨年発生した新潟県中越地震による被害について現地での観察を通じて議論するために企画され、太田陽子氏(横浜国大名誉教授)、鈴木郁夫氏(新潟大)、吾妻 崇氏(産総研)の3氏のご案内で、13名が参加して実施されました。見学地は旧三島町、長岡市、小千谷市、旧広神村、旧山古志村、川口町、旧小出町、旧六日町、十日町市と広範に渡り、長岡平野東縁断層、長岡平野西縁断層帯、六日町断層帯、十日町断層帯に関わる変動地形、中越地震に伴う斜面崩壊、液状化被害、地表地震断層を観察し、討論することができました。

中越地震の発生があと1分ほど遅かったら、倒れてきたスチール書棚と事務机との間に挟まれて命を失っていたであろう筆者にとって、この地震が特別な事件であったことは間違いありませんが、この野外集会が、中越地震も繰り返し発生するごく普通の自然現象のひとつでしかないことを確認し、被災地に居住する本学会会員として、また、教育機関に身を置く者として、今後何をすべきか示唆される有意義なイベントであったことを記して、上記案内者の方々と旧広神村小平尾における地表地震断層をご案内くださった丸山 正氏(産総研)に感謝申し上げます。

(長岡市立科学博物館 加藤正明)



小千谷市片貝町の活断層露頭



旧山古志村東竹沢の河道閉塞



小千谷市横渡の層理面滑り崩壊

2004年度第8回幹事会議事録(新旧幹事合同)

日時: 2005年8月11日(木) 14:00 ~ 18:45
会場: 首都大学東京8号館874号室にて

出席者: 熊井久雄(前会長)、町田 洋(新会長)、真野勝友(副会長)、山崎晴雄(前幹事長)、松浦秀治、小野 昭、池原 研、奥村晃史、河村善也、岩田修二(研連・新会計監査)、鈴木毅彦(新幹事)、中川庸幸(事務局)、久保純子(庶務)
欠席者: 斎藤文紀、兵頭政幸

町田新会長紹介ならびに新旧幹事顔合わせ後、議事にはいった。

なお、会長推薦幹事として遠藤邦彦会員と岡崎浩子会員が推薦された(当日は欠席)。

・ 通常議事(報告、審議事項)

1. 庶務

- ・ 会員消息(5~7月分)報告
- ・ 寄贈図書報告
- ・ 転載許可願: 第四紀研究37p.406 図9(熊原康博)の共立出版『日本の地質 増補版 四国地方』
- ・ 会費長期滞納者の扱いの件: 会誌の取り置きや書類発送など学会の負担が大きい長期会費滞納者(119名)に対し、次回最終通告をおこなうこととした。
- ・ 会則改正の件: 学会倫理憲章策定にともなう第5条の改定、団体購読会員廃止にともなう第6条ならびに第7条の改定、事務局移転にともなう付則1の改定、新施行日による付則2の改定原案を作成した。

2. 会計

- ・ 編集書記の大会出張時の日当を支給することとした。

3. 編集

- ・ 投稿規定改定案(評議員会提出)原案を作成し、執筆要項の改定(編集委員改案)を承認した。

4. 行事

- ・ 島根大会におけるバックナンバー処分の方法を決めた。

5. 広報

- ・ 岩本編集書記委嘱継続の件を承認した。

6. 渉外

- ・ 合同大会プログラム委員は次期渉外幹事があたる。島根大会で「地球惑星科学連合ニュース」を参加者へ配付する。

7. 企画

- ・ 講習会の報告。

8. その他

8-1 学会倫理憲章策定

- ・ 委員会原案に対する修正意見を審議し幹事会原案を作成した。
- ・ 倫理憲章策定に伴う会則改定案を審議した。

8-2 論文賞選考委員会報告の件

- ・ 選考委員会報告に対し、受賞者の資格の件で規定ならびに内規を確認し、これまでの経緯等も議論した上で今回の結果を幹事会として承認した。
- ・ 現行の「論文賞」のありかた、選考基準、審査期間、委員会の選考結果を幹事会で確認する手続き等について意見を交換し、選考委員長より幹事会へ報告していただくこと、50周年にむけて「学会賞」や「奨励賞」などの新設を検討することを次期幹事会へ申し送ることとした。

8-3 シャックルトン教授来日の件

旭硝子財団の2005年「ブループラネット賞(地球環境国際賞)」にINQUA前会長のニコラス・シャックルトン教授が選ばれ10月に来日(授賞式・記念講演)するため、会員への情報提供とともに第四紀学会としての対応を協議した。

8-4 地質年代区分に対する学会としてのコメント

「地質学会年代区分キックオフミーティング」第1回議事録では一部誤解があるようなので、次回10月21日に斎藤文紀幹事が出席する。9月のベルギーの会議の情報を入手する。

8-5 博物館連絡委員会の設置

熊井会長より、「博物館連絡委員会(世話人代表: 松島義章会員)の設置について説明があり、学会と博物館との連携、会員への情報提供などを推進するため、特別委員会を組織し、連絡体制づくりと活動方針などを諮問することとした。

8-6 50周年記念事業

山崎幹事長より実行委員会報告として、1)第四紀研連シンポジウム「地球史の現代と近未来 - 自然と人類の共存のために」の記念出版(東大出版会)、2)電子出版の編集状況、3)博物館共催行事、4)国際シンポジウム、5)募金の開始、6)記念大会(首都大)とシンポジウム、7)高齢会員の退会対策、の内容が報告され、これらの事業について検討した。また、次回評議員会、総会に提案する募金の実施について原案を作成した。

8-7 評議員の繰り上げ

考古学分野の春成会員・稲田会員が評議員辞退のため、御堂島 正会員・長友恒人会員を繰り上げ当選とすることを確認した。

・ 新幹事役割分担

新幹事会の役割分担、会長推薦幹事の追加、編集委員会ならびに広報委員会の構成について協議した(暫定案を作成した)。

・評議員会・総会資料の準備

(次回幹事会等)

8月26日(金)12:00~13:00、島根大学にて(新旧幹事とも)

8月26日(金)の評議員会は旧幹事会がすすめる。

8月27日(土)の総会は新幹事会がすすめる。

2005年度第1回幹事会議事録(新旧合同)

日時:2005年8月26日(金)12:00~13:00

会場:島根大学総合理工学部3号館301教室にて

出席者:熊井久雄(前会長)、町田洋(新会長)、真野勝友(副会長)、山崎晴雄(前幹事長)、松浦秀治、池原研、奥村晃史、兵頭政幸、遠藤邦彦(会長推薦幹事)、鈴木毅彦(新幹事)、水野清秀(会長推薦幹事)、久保純子(記録)

欠席者:小野昭、河村善也、斎藤文紀、岡崎浩子(会長推薦幹事)

議事

- ・会長推薦幹事として水野清秀会員が新たに推薦された。
- ・評議員会、総会の準備を行った。
- ・評議員会は旧幹事会がすすめるが、総会については新幹事会の役割分担が未定(暫定体制)のため、それぞれが「幹事」の資格で担当することとした。

2005年度第2回幹事会議事録

日時:2005年10月1日(土)14:00~17:30

会場:早稲田大学教育学部にて

出席者:町田洋(会長)、遠藤邦彦、岡崎浩子、奥村晃史、斎藤文紀、鈴木毅彦、兵頭政幸、水野清秀、中川庸幸(事務局)、久保純子(記録)

欠席者:真野勝友(副会長)、池原研

議事に先立ち、町田新会長よりあいさつがあった。

議事

- ・幹事会引き継ぎ事項の確認
旧幹事会からの引き継ぎ事項について確認した。
- ・会員数減少対策
- ・会員に対するサービスの内容
- ・論文賞選考委員会の審議期間の確保、50周年を契機に新たな賞を創設してはどうか
- ・評議員の多選による幹事候補者の減少

- ・評議員選挙の方法
- ・「第四紀研究」の電子化
- ・博物館連携特別委員会のたちあげ
- ・研究委員会の運営
- ・学会倫理憲章にともなう細則の検討(著作権など)

・幹事会役割分担

各幹事の役割分担について以下の通り決定した。

幹事長:斎藤文紀
 会計幹事:鈴木毅彦
 編集幹事:池原研、岡崎浩子
 行事幹事:遠藤邦彦、水野清秀
 広報幹事:兵頭政幸
 渉外幹事:奥村晃史
 企画幹事:水野清秀、奥村晃史
 庶務幹事:久保純子

・会則、規定等の確認

規定等は学会ホームページに掲載することとした。年度別評議員、幹事リストの確認をおこなった。

・報告・審議

- ・入会1名、退会4件
- ・掲載許可 ナカニシヤ出版(社)日本山岳会編『新日本山岳誌』へ、第四紀研究7巻(松田時彦・岡田篤正論文の図)
- ・学生会費届出者リストの確認
- ・編集委員2名(西田泰民・渡邊眞紀子両氏)を承認した。
- ・1月のシンポジウム、評議員会について検討した。
- ・研究委員会の活動については、INQUAに対応する委員会として足りない分野をふやすことが必要との提案があった。
- ・地質年代区分について(9月のベルギーの会議は最終決定ではない等、学会としての情報提供を行うこととした。熊井前会長に解説をお願いする)
- ・学会ホームページの英文を充実させる。
- ・学術会議の状況について町田会長より紹介があった。
- ・韓国の第四紀学会副会長との懇談結果が斎藤幹事長より報告され、50周年記念大会や国際シンポジウムに向けて今後連絡を取ることにした。
- ・50周年事業実行委員会に会長、幹事長、行事幹事が職責上出席することを連絡する。
- ・今後の活動スケジュールの確認
「通信」原稿締切は奇数月第1週、発行は偶数月1日
評議員会で審議が必要な名誉会員選出、論文賞拡充などの準備をおこなう。
- ・科研費申請(成果公表)は見送った。

次回幹事会予定

11月6日(日)14:00~、早稲田大学にて

2005-2006 年度幹事会

島根大会の総会では役割分担は暫定体制でしたが、このたび次のような幹事会の体制でスタートいたしました(正式には1月の評議員会で承認いただく予定です)。

幹事長：齋藤文紀
会計幹事：鈴木毅彦
編集幹事：池原 研・岡崎浩子
行事幹事：遠藤邦彦・水野清秀
広報幹事：兵頭政幸
渉外幹事：奥村晃史
企画幹事：水野清秀・奥村晃史
庶務幹事：久保純子

編集委員会：池原 研(幹事)・岡崎浩子(幹事)・苅谷愛彦・清永丈太・佐藤慎一・須貝俊彦・樽 創・中里裕臣・長橋良隆・西田泰民・藤原 治・横山祐典・米林 伸・渡邊眞紀子・綿引裕子(書記)

広報委員会：兵頭政幸(幹事)・松下まり子・後藤秀昭・岩本容子(書記)

50周年記念事業実行委員会：熊井久雄(委員長)・山崎晴雄(事務局長)・岩田修二・遠藤邦彦・小野 昭・河村善也・久保純子・齋藤文紀・杉山雄一・鈴木毅彦・中村俊夫・町田洋・松島義章・真野勝友・水野清秀・三田村宗樹・御堂島 正・渡邊眞紀子

編集・印刷ミスの訂正とお詫び

第四紀通信 第12巻5号22ページ、資料(3)2004年度会計監査報告書において、最終行、上杉 陽監査委員の署名が欠落しましたので、訂正してお詫びいたします。

第四紀研究 第44巻5号において、販売金額に誤りがございました。正しくは2100円(税込)となります。

資料 (3) 2004年度会計監査報告書

日本第四紀学会

会長 熊井久雄 殿

2004年度会計監査報告書

2005年8月10日(水)、(株)春恒社 会議室において日本第四紀学会2004年度収支決算報告書(2004年8月1日～2005年7月31日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


なお、日本学会事務センター破産に伴う諸処理が終了したこと、また(株)春恒社との新たな事務委託に伴い、従来から指摘されていたいくつかの懸案事項が解決されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。


以上

2005年8月10日(水)

会計監査

菊地隆男 

会計監査

上杉 陽 

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月第1週原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757
広報委員：松下まり子・後藤秀昭 編集書記：岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDF ファイルを閲覧できます。